

第1回 札幌市生涯学習推進検討会議 概要録

1 会議次第

- (1) あいさつ（生涯学習部長）
- (2) 各委員の自己紹介
- (3) 議長、副議長の選出
- (4) 第3次札幌市生涯学習推進構想の策定について（概要説明）
- (5) 第3次札幌市生涯学習推進構想の基本的方向性（協議）
- (6) その他

2 日時

平成28年(2016年)6月22日(水)10時～12時

3 場所

札幌市教育委員会4階 委員会会議室

4 出席者

(1) 委員（10名）

石井委員、臼井委員、川端委員、木村委員、佐久間委員、竹川委員、平島委員、三上委員、三坂委員、和田委員

(2) 事務局（5名）

山根生涯学習部長、大場生涯学習推進課長、近藤生涯学習係長、齋藤社会教育主事、永山社会教育主事

5 開催形態

公開（傍聴者なし）

6 主な議事の内容

(1) 議長・副議長の選出

議長に佐久間委員、副議長に三上委員が選出された。

(2) 第3次札幌市生涯学習推進構想の策定について（概要説明）

○資料1について事務局（近藤係長）より説明。

(3) 第3次札幌市生涯学習推進構想の基本的方向性

○資料2及び資料3について事務局（近藤係長）より説明。各委員からの意見は次ページのとおり。

<全体について>

- ・資料3「2 札幌（第3次札幌市生涯学習推進構想）の目指す姿と構想の柱」に「札幌の豊かな学習資源」とあるが、どのような意味か。（竹川委員）

→札幌市の施設・自然・学習する機会・活動する人々等の全てを総括し、このように表現している。（大場課長）

→抽象的な表現なので、思考停止になってしまう。このような言葉を使えば使うほど、具体的に何をするのかということが曖昧になる。豊かな学習資源があるので、それぞれの人が問題意識を持って行動しなければならないというふうに文章が作られていかなければならない。（竹川委員）

- ・資料2の「生涯学習をテーマとする世論調査」で「『生涯学習をしていない人』の割合は約4割」とある。この数値は、回答者個人に生涯学習の概念の捉え直しがあると大きく変わる数値、つまり「本当は生涯学習の取組をしているが、自分ではしていないと思っている人」も「していない」に含まれるという、個人の認識に基づく数値という理解で良いか。（臼井委員）

→そのような理解で差し支えない。市政世論調査は調査票への回答に基づくもので、この数値は「生涯学習への取り組み」という設問において、「芸術・工芸・芸能・音楽に関すること」「健康・スポーツに関すること」等の学習活動の内容が並んだ選択肢の中で、「していない」を選んだ人の割合。個人的な認識に基づく数値ではあるが、生涯学習のイメージ・意味が市民に定着していないことを示すとも言え、第2次札幌市生涯学習推進構想（以下、「2次構想」という）で行政の役割とした「生涯学習の理念の普及・啓発」に課題が残っていることを示す数値であると考えている。（近藤係長）

→国でも生涯学習に関する世論調査を実施しているが、「生涯学習の捉え方」で数値が変わっている。臼井委員の言う意味では、このデータを重く捉えすぎるのはあまり良くない。（佐久間議長）

- ・施策の検証を目的とした内容の調査票を用いない限り、このデータで施策の評価はできない。（竹川委員）

<資料3「1 生涯学習に期待される役割」について>

- ・「まちで活躍できる人材の育成」に関して、個人的にいろいろな活動をしている人はたくさんいるが、それをまちづくりに生かしているかと聞かれれば「まちづくりではない」と認識している人は多いと思う。しかし、実際にはまちづくり生かされているということも多い。（石井委員）

- ・「人材育成」という言葉から具体的なイメージが湧かないのだが、「『まちで活動してます』と言える人を育てる」ということか。例えば、人材リスト（名簿）に掲載されて、市民に活用してもらおう、というような。（石井委員）

→この部分は個々に活動している人をどのようにまちづくりにつなげるか、という課題認識に基づいている。個々の学びももちろん大切だが、これからはまちづくりにも関心を持ってもらうことが必要。人材リストを作るような取組ももちろんあてはまるが、活動している団体同士が自発的に結びついたり、新しいことを発見できるような機会を設けるといような行政の取組も、この「まちで活躍できる人材の育成」に含まれると考えている。（大場課長）

→近年の社会教育委員会議の議論では、まちづくりや子育て支援など、「様々な場面での担い手不足が課題」という御意見が多く出ていた。担い手が足りていない部分に広く市民が関わっていきけるきっかけを作る取組も、広い意味で「まちで活躍できる人材の育成」に含めて考えている。石井委員のようなすでに活動している方に対し、活動しやすいようにサポートするという取組もここに含んでいる。（近藤係長）

→「活動を広げたい」と考えている人も多いので、良いと思う。（石井委員）

- ・「まち」「コミュニティ」に重きを置きすぎており、やや狭く考えすぎている印象を受けた。資料3「2 札幌の目指す姿と構想の柱」のⅡでも「札幌のまちで生かす」と限定されている。北海道における190万都市である札幌市の、名実ともに社会を引っ張っていくという役割を考えると、札幌のみを主語することに疑問を感じる。もっと広域的な視点、大きな土俵で考えた方が札幌らしいのでは。札幌で学んで、それぞれの町に戻っていく方々もいる。そのような意味でも、「札幌」と狭く捉えすぎている印象を受けた。（臼井委員）
- ・「まち」「コミュニティ」の文脈だけで良いのか疑問。政府からは一億総活躍社会が打ち出されており、地域を活性化するというが、生涯学習における「人間や世代を活性化する」という視点への言及があっても良いのでは。例えば「各世代を元気づける役割」だとか。学習は人間がするものなので、人間そのものにスポットが当たった言及が必要。（臼井委員）
- ・「生涯学習をしていない人が4割」という部分にも関連するが、「生涯学習」という言葉は重く、「勉強しなきゃ」というイメージが強い。生涯学習にも段階があると思うが、いろいろな段階を経て学びを積み重ねた人が、まちづくり活動を行っているイメージがある。自分自身が人間として向上するために学習をすると

いう部分、例えば「家庭で役立つことを学ぼう」ということなどに触れられていない。「これでは難しく勉強できない」という内容になっており、躊躇する市民もいると思う。個々の段階、それぞれに合ったものにマッチするものがあれば良い。（川端委員）

- ・教育基本法で示された生涯学習の理念は、「国民一人一人が自分を磨きながら豊かな人生を送れるようにしていく」ということ、「それを支えるためにいろいろな機会や場所を提供する」ということ、「その結果が社会に返ってくる」ということが述べられており、これを実現するために何ができるのか、ということで第3次札幌市生涯学習推進構想（以下、「3次構想」という）が検討されている。2次構想の検証を行って残された課題を抽出したものの、「1 生涯学習に期待される役割」となったときに、内容が狭まった印象がある。特に課題となっていた「人とのつながりづくりやコミュニティの醸成に寄与する方策の必要性」からこの2つの役割が導かれると思うが、本来の生涯学習の視点が抜け落ちたような印象を持った。しかし「2 札幌の目指す姿と構想の柱」となると、本質的な部分への言及が戻ってくる。（木村委員）
- ・具体的な取組が想像できないので、対象の絞り込みが必要。「学んだ成果をまちづくりに生かす」とあるが、これは生涯学習センターで学んだ人が生かしていないということと自分は理解した。また、人材の育成とあるが、これは大人を対象にして「学びを生かせる人を作る」ということ。大人を対象とした学びについて、このように漠然とした表記で書いているのは、行政が批判を受けたくないからかと思うが、施策を科学的に検証すれば批判には対応できる話。学会で確立された施策の科学的な検証方法を用いて、行政は明確な施策を打ち出していくべき。（竹川委員）
- ・国が示した「自立・協働・創造の生涯学習社会」は普遍的な理念だが、自立は学校教育で学ぶべき。大人が自立を学ばなければならない存在であるというのは恐ろしいこと。（竹川委員）
- ・「学び」と言ってしまうと、いつまで経っても学ぶばかりになってしまうので、「実践の充実」という観点が必要。柱のⅡは「個人の自立と共生に向けた実践の充実」と言い換えるべき。（竹川委員）
- ・生涯学習は0歳から高齢者までを対象としているが、「30代40代の企業に勤めている人も対象」というイメージが一般的に薄い。「定年退職後や、子育てがひと段落した後にやりたい人がやる」というイメージが強い。企業に任されてしまっ

ている従業員教育や、キャリア教育の視点を入れてほしい。（平島委員）

- ・ 2次構想の検証から導いた、環境整備・多様化・地域づくりの3本柱で行くならば、地域づくりは内容の濃い部分だと思うが、環境整備としての具体的な場への支援、例えばリラコワ（男女共同参画センターの指定管理者である、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会の運営する、女性のためのコアワーキングスペース）への支援は行政がもう少しできることかと思う。また、多様化に関連しては、企業や会社、またその世代に関することも生涯学習に期待される役割に入った方がよい。地域づくりはもちろん必要だが。（平島委員）
- ・ 「札幌市の教育が目指す人間像」は「自立した札幌人」。学ぶということは個々の意志に基づいた作業で、教えられるということとは違う、自ら何かに向かっていくという作業。学習という言葉を使うとイメージが偏ってしまい、一般的には「今さら勉強？」という印象を与えてしまうが、「学び」を「社会の中で主体的に何かを体験したりすることを通して気づいたこと」と定義すれば、その気づいた学習体験が地域や社会の中で何らかの役割を果たさなければ「自立した札幌人」ということにならないので、そのための仕組みづくりは不足していると思う。この仕組みについて、視点は広く世界に、グローバルに、ただし実践するのはまず身近な地域から、というのがその第一歩。それを行っていく際、地域の人々が社会に関わろうとしたとき、そこをつなぐ・コーディネートするという役割をまちづくりセンターに位置付けて、その地域のインキュベーターの役割をするというか、地域の人々がもっと広いところに少しずつ出て行って広い視点を持つためのインキュベーターの役割をするような仕組みを作れば、どの世代のどんな人でも、いろいろな形で関わって、その体験を通して自立の意識が高まるのでは。そのような仕組みづくりをやっていくべき。（三坂委員）
- ・ ボランティア活動などをしたり、いろいろなものを読んだり聞いたりする中で、行政の上から目線を感じることもある。ボランティア組織が力をつけてくると、排除したり提案することを反対したくなるのが行政の体質だと思う。行政に関わる一人一人も、市民として主体的に広い心を持って関わり、協働・同じ目線での体験をすることでまちは高まっていく。漠然とした言い方になるが、芸術文化の振興や学校教育など様々な場面で、一人一人が総合的だがやわらかい雰囲気を感じながら日々を営んでいく仕組みづくりが必要。（三坂委員）
- ・ 学びの主体は市民、というところをまず押さえないといけない。また、誰もが学んでモチベーションを持って発展し、さらにその力を地域で生かしていくこと

が生涯学習の理想とする姿だが、今回3次構想ということで、「誰もが学ぶ場の提供」というところの強調が終わり、次のもう少し専門性のある部分を強調しているので、抜けた部分があるような印象を与えている。1次構想、2次構想から段階を経てきたことで、今回このような作りになっていると解釈した。（和田委員）

- ・ 3次構想で強調している専門性の部分、すなわち様々な問題を解決できる人材の育成に関し、人々が学びで得た力をもう少しプロフェッショナルな形で発揮していけるような取組を行う際に、三坂委員の言うような仕組みづくりは大切な視点となる。その仕組みづくりについて、子どもに対して地域や企業の人々が様々な形で関わっていく、サタデースクール事業の取組がヒントとなる。様々な世代に適応する仕組み・誰もが学んだ成果を相互に発揮し合う仕組みがあれば、資料3にある2つの「生涯学習に期待される役割」が達成される。この仕組みについて、まちづくりセンターの役割を発展させることで、ローコストで解決できる可能性があると思う。（和田委員）
- ・ 臼井委員・木村委員・平島委員から「生涯学習に期待される役割」について、力点の置き方が狭すぎるという主旨の御意見があった。これは、まちづくり戦略ビジョンで示された目指すべき2つの都市像「北海道の未来を創造し、世界が憧れるまち」「互いに手を携え、心豊かにつながる共生のまち」という、簡単に言うと「攻めと守りの都市像」と関係があると思った。守りの都市像に関係する学習にシフトしているという印象が、皆さんの御指摘の背景にあるのだと思う。臼井委員の御意見から考えたが、「札幌には魅力的な学びの場やボランティアの機会がある」ということで、札幌にどんどん人が集まってくるというのが前者の都市像につながり、生涯学習に期待される役割の一つとも言える。戦略ビジョンの2つの都市像のバランスをどうとるかも課題。（三上副議長）
- ・ 和田委員の御意見から考えたが、1次構想や2次構想とは違うビジョンを示すために「生涯学習に期待される役割」として3次構想の特徴を出したことで、欠けているように見え、委員の違和感につながったのだと思う。解決策を持っていないのだが、これまでの20年間の蓄積をどう踏まえて、どう違いを出すのかは難しい。同じことを繰り返せば良いというわけではないので、絞ったことに意味はある。（三上副議長）
- ・ 竹川委員から政策評価と組み合わせるという視点についての御意見があったが、10年間の構想なので、2年3年の事業で求められる評価とは枠組みが異なる。構

想にふさわしい記載内容の詳しさ、理念の解像度を会議で共有した上で議論できれば。（三上副議長）

- ・10年間を見据えた構想であること、既に策定された上位計画であるまちづくり戦略ビジョンとの整合性を取ることは、会議の場において共通認識として大事にすべき。（佐久間議長）

- ・個人に着目した部分、一人一人の興味に基づく学習や関心についての記載がないという印象を受けた。一人一人の個人が充実し、豊かな生活をした上で、人材として地域で活躍したり、コミュニティ醸成に寄与したり、とつながっていく。

（佐久間議長）

＜2 札幌（第3次札幌市生涯学習推進構想）の目指す姿と構想の柱＞

- ・皆さんの意見を聞き、基本的方向性がまち・コミュニティに重点を置いていて、個人の視点が抜け落ちているからこそ、自分は違和感を持ったことに改めて気付いた。「2 札幌の目指す姿と構想の柱」も「まち」が強調されているが、生涯学習は人づくりだということが大事。資料2で札幌市民のまちへの愛着度が高いことが示されているが、これは今の生活に満足している人が多いということの表れで、満足しているからこそ学ぶ必要がないと考えている人も多いと思った。もちろん自分の生活に役立つ学びをしている人は多いが、まちに生かせる学びを生涯学習と言ったときに、それはやっていないという認識の人が多いのでは。（石井委員）

- ・多様な価値観、多様な意識、経済的なものを含めて、様々な格差は今後拡大していく。学びなどの取組を通し、個人個人が向き合うことによって、価値観の違い・あらゆる差異を分かり合える社会を作っていくと、社会は非常にばらばらな個々人の集まりになってしまう。様々な階層・世代の人とうまく理解し合える鍵は、学びでしか得られない。そのことをこの文章に書き込みたい。（臼井委員）

- ・情報化が進み、それを人々が活用していくことを前提としているが、まだまだ情報弱者は存在しており、世代・経済的な背景もあるので、この差異は今後もなくなっていくかない。情報弱者を作らないことを心掛けなければ、学習する人の豊かさにはつながっていくかない。（臼井委員）

- ・ある程度お金や時間に余裕のある人が学んでいるという印象がある。本来学ぶべきだが、学んでいない人への取り組みに力を入れてほしい。それぞれの個々人が様々な場で、様々な学ぶ方法があると、最終的にはそれが生涯学習の役割につな

がる。例えば子育て世代の方は、子育てへの学びではない「自分のための学び」になると、二の次三の次となっているという現状がある。サラリーマンも同様。このような人々の存在も念頭に、個々人を高める学びをどう表現すれば良いかが課題。（川端委員）

- ・ I～IIIの構想の柱については、今までの議論から導かれた課題を踏まえている。ただ、この文章では想像力を働かせないと、具体的なイメージが広がらない。わかりやすい表現を心がけたい。この目指す姿がもっと市民に具体的にイメージされるようなものになれば良い。カッコ内の言葉から具体的にイメージされにくい。（木村委員）
- ・ 構想はたかだか 10 年間という短期間の計画であり、具体的な性質のもの。生涯学習をどう進めるかを具体的に構想するのだからこそ、もっとわかりやすく書くべき。具体的に書くと行政が批判を受けるということであれば、市民に質問調査票を送り、施策を科学的に検証すれば良い話。（竹川委員）
- ・ コミュニティという言葉からいろいろな意味が想像されてしまう。「1 生涯学習に期待される役割」には「地域社会における信頼関係や結びつき」とあるので、これを踏まえて具体的に書くべき。具体的に書くことで、行政はこういうことを考えているということがわかり、市民が動き出す。行政が仮説を検証する姿勢が必要。そうなる于是他にお金をつぎこむべきところがわかる。（竹川委員）
- ・ 個人の視点が入ると全体的に良くなる。「自立した札幌人」が目指すべき姿であり、自ら課題を見つけて行動する力が生きる力。子育ての最終目標は自分で考えて行動できるという「自立」なので、そのことを書き込めれば良い。それをどう学習という視点に落とし込めるか考えたい。具体的な表現だと、市民はすぐ入りやすい。（平島委員）
- ・ 会議の中で気付いたことだが、1次構想・2次構想で語られたことが実現に向かっているとして、3次構想はこの先の10年で社会がどう変化していくかを考えたときに、「今までの個として学んだり自己研鑽したことだけでは社会は成り立たなくなるよ、それゆえつながり、つまり地域やコミュニティがしっかりした信頼関係のもとにつながっていかねばならないんだよ、そのためには個だった意識を地域や社会に向けましょう」ということをみんなに気づいてもらうということが、3次構想の役割なのでは。（三坂委員）
- ・ 抽象性と具象性のバランスを整えながら委員意見をまとめると、素晴らしいものになると思った。（和田委員）

- ・ Iに「様々な理由で学習することに壁を感じている市民も少なくない」とあるが、まさにその通り。特に我々の世代がそうだと思うが、働いている人々が改めて学習に取り組むというライフスタイルになっていない。仕事中心の生活が普通のことになっている。文章への修正意見ではないが、そのバランスを整えるために何ができるのかという観点が大事。（三上副議長）
- ・ 三坂委員の御意見から、どのように教育・学習における個と社会のバランスをとるのか、特に生涯学習についてはそういったある種の揺り戻しがあるのは委員の御指摘のとおりだと思った。臼井委員の「多様性を認め合う鍵は学習」という御意見から、個人と社会の関係を調整する必要性はあらゆる現場にあり、そのようなことを抽象的な話ではなく、我々札幌市民が個別具体的な現場や、課題に即してできるようになっていく視点が大事と思った。これらは構想を議論する上で大事な観点。（三上副議長）
- ・ Iは体制整備、IIは人づくり、IIIは地域づくりとして整理できる。他市町村の推進計画はこの3本柱で作られていることが多いが、並び順がこれで良いのかは検討すべき。また、Iは体制整備を主旨としながらも、学習機会の提供という人づくりの要素も入っているので、そのあたりの整理があっても良い。（佐久間議長）

(4) その他

○次回会議は8月29日を予定。